

受賞作品

# 近世米市場の形成と展開 —幕府司法と堂島米会所の発展

高槻泰郎著

名古屋大学出版会 iii,403 ページ 6000 円 (税別)



書評

## 幕府の施策に光

一橋大学名誉教授 斎藤 修

大坂堂島にあった米会所は 18 世紀に現物に加え、先物取引市場を開設した。本書はその制度形成を跡づけ (第 I 部)、幕府司法の機能を論じ (第 II 部)、市場の効率性の測定 (第 III 部) を試みた力作である。米価の長期日次データを復元、経済学の分析道具を駆使し、また非数量データをも十分に使いこなした上での仮説検定が行われており、近世経済史研究の水準を大きく引き上げたと評価できる。

第 II 部が特に興味深い。先物市場が登場すれば不渡りの可能性が生じるが、それへの幕府の対応は 1761 年の空米切手停止令に代表される。従来、幕府は大名に蔵米の裏づけを欠く切手の発行、売買を禁止しようとして失敗したと解釈されてきたが、著者によれば、幕府が求めたのは蔵米準備で、債権者には奉行所への訴権を認め、事後的に不渡りの回避を狙ったという。

さらに、幕府は資金的に余裕のない小藩に対しては公的資金投入で対処しており、効率的市場の背後には、このような幕府司法とその運用による支えがあったというのが著者のメッセージである。

このように意欲的な研究ではあるが、この時代の制度設計の全体像がどのようなものであったか、本書の発見事実との関連で述べられているとさらによかった。